

# 集まって住むカタチのデザイン

～世界の美しく小さな集落やまちを訪れて思うこと～

## 第6回 適塾路地奥サロン

日時:平成30年11月2日(金)18:30～

場所:アルパック大阪事務所 大会議室

講師:江川 直樹氏(建築家/関西大学環境都市工学部 教授)

7年ほど前に約2ヶ月間、南フランスの集落を回りながら、それまで考えていたことの確認やら新しい発見やらをしました。帰国後にはいろんなところでお話しましたが、結構核心的な内容だと思うので、今日はそんな話とさせていただきます。

### ■これまでの設計・大学活動について

その前に、私の取り組んできたプロジェクトや現在の取り組みにも連動する話なので、少し概要をお話します。1982年に現代計画研究所大阪事務所を開き、その頃から「場所の声を聞く」「小さく解く 混ぜて解く」「間」の空間をいかに設計するかなどを考えていました。その後、設計事務所ではできないようなカタチで集住環境に関われないかと、2004年に関西大学の教員になりました。東京の現代計画にいたころ、最初は、外部空間の設計の仕事を担当しましたが、その時にアイダの空間の面白さや重要性に目覚め、どうすれば現代版集落のようなものを計画的につくることが出来るか、例えば、美しい影と共存できる環境や苔のある環境のようなものを設計の目標にできるかなどを考えはじめました。

六甲道駅南の集住再編プロジェクトではいろいろな方と一緒させていただき、われわれも一街区の設計を

させていただきました。阪神間では六甲山の眺望が重要なので、いつも六甲山が家からも周りからも見えるように考えています。芦屋の若宮町は震災後に再建したまちですが、昔から続いてあるまちのように見えると思います。このように、公営住宅がまちの中に散在している例は珍しく、隙間があって快適な環境になることを目指しました。京都のアーバネックス三条という賃貸集住では、住宅内部もですが、まちとしてのスケルトン・インフィルを考えました。住宅公団が昭和37年から2年間で4,600戸をつくった浜甲子園団地の建替プロジェクトでは、高さ制限を取り払って足元の隙間と高低差のある建物で、背景の空との共棲を目指しました。

大学に行ってから最初は、1年の半分は空中住宅、半分は水上集落になるというカンボジアの美しい両棲集落を発見し、学生たちは実測を継続して集落全体の実測図を作成しました。その後は、実際に日本の過疎の中山間の村や、団地やニュータウンと付き合いながら、集落的集住環境に再編するプロジェクトに取り組んでいます。丹波市の佐治スタジオ、八幡市の男山団地だんだんテラス、河内長野市南花台のコノミヤテラスなど365日オープンな拠点を整備し、学生や卒業生が常駐しながら、コミュニティの再編と併せ、例えば賃貸住戸を



空との共棲を目指した浜甲子園団地



カンボジアの美しい両棲集落(カンボンブロック村)



## 集まって住むカタチのデザイン ～世界の美しく小さな集落やまちを訪れて思うこと～

自由に改装して原状回復しなくても良い仕組みや、リノベーションを支援する拠点だんだんラボを整備運営するなど、生活者が参加できる仕組み作りに取り組んでいます。南花台ではこういったまちづくりの機運に乗り、UR団地の集約化という再編が始まっており、また、廃校になった小学校に看護専門学校を誘致、地域拠点の機能を持つ環境へと改編したりしています。

### ■南フランスの集落を訪ねて

そんななかで、南フランスの限界集落とも言えそうな小さな集落の調査に出かけました。南仏の前に、大学でテキストとして使っている「集落の教え」の最初に出てくるアルジェリアのガルダイアに寄り、その後、ポルトガルの小集落に寄ってから南仏に行ったのですが、ちょうど東北を津波が襲った後で、丘の上と下にまちがあるナザレの気持ち良い風景を見た時は、東北もこういうまちになると良いと思ったのですが…。

ポルトガルから小ぶりで素敵なニースの空港に着き、最初に近郊のマントンを拠点にしました。集落探して電車の窓から外を見ていると山の中腹に美しい集落が見えたので、次の駅で降りました。駅前には右サオルジュ、左フォンタンという標識だけがあり、駅からの距離も分からないまま方向だけを頼りに右に歩きはじめ、何とか集落にたどり着きました。午前中だったので住民は働きに出ていてまちの中には人の姿が見えず、観光バスでは行けないような行き止まりの村でした。

まちの中は、この辺りの山岳集落に共通するように、急峻なコンタに沿って奥行きのない建物が建ち、斜面に集まって住む形になっています。人はいなくても、開け放した窓や人の手で植えられた緑が、人が住んでいることを表しています。また、この辺りの集落は元々防御のために



斜面に集まって住む形（サオルジュ）

つくられたので、遠くからは見えないが、集落からの景色は素晴らしく、集落は住む人が愛着の持てるもの、集落からの眺望や景色が大切と確認することができました。まち全体は、高密度のところとそれ以外のところでメリハリがあり、日本はスプロールしてメリハリがないのに対して、よくこのような集落ができたと思いますね。学生の頃は建物の色や材料を揃えるように習いましたが、こういう集落を見ると、時間の経過でそれぞれが更新しているのが美しく、むしろ揃っていない方が綺麗だと感じます。私は以前から揃っていないほうが良いと言っていましたが、集まって住む環境は、空気感やスケールは揃っても、各々の建物は揃っていないところに多様性ゆえの美しさがあるのですね。

一般の来訪者には分からないような教会の裏手で偶然に墓地を発見しましたが、陽当たりが良くて、そこからの景色は抜群でした。この人々は毎朝出掛ける前にお墓に花を供えているようで、墓地は綺麗な花でいっぱい、実はどこの集落でも同じだったのです。

次に行ったエズというまちは、ニースに近く観光地としても有名でしたが、人の入り込まないようなところでも手入れされた緑が綺麗でゴミ一つ落ちていませんでした。



丘の上と下の両方にまちが存在する（ナザレ）



美しく手入れされた緑（エズ）





集落内からは美しい景色が見える(エズ)

住民それぞれがきれいにしているのでしょう。集落ではどこも斜面に並ぶ建物の隙間から光が射し込んでいて、光と影が混ざり合った素晴らしい空間を創り上げています。これはどこの山岳集落でも感じることです。ここでも集落の隙間から見える景色が大変に美しく、やはり住んでいる集住環境から見える景色の美しさが住む根拠ではないかと思えます。

現地では、基本的にバスセンターでバスのルートを確認し、地図を見ながら集落を探したりするのですが、この辺りは海岸線に対して直角に谷と尾根があって、バスは谷を走り、集落は山の上にあるので、集落から他の集落に行くには一度海岸線まで戻らなければなりません。山道は大型のバスが走らないのでガードレールはなく、擁壁と同じ材質の立ち上がりがあるだけで、それが違和感がなくて美しい原因になっています。

小さな集落の観光案内所(オフィス・ド・ツーリズム)では若い女性が対応してくれましたが、彼女たちは観光案内だけが仕事ではなく、他にもいろいろな仕事をしています。少人数の小さな集落は兼業でなければ成り立たないので、ホテルも兼業ですね。フランスのホテルの看板には「chambre=部屋」と書いてあるのが多いの



道の先には空が見える(エズ)

ですが、要は民宿の部屋貸しが語源でしょう。専門の宿泊施設ではなく、レストランやカフェにもなっています。イタリア等でも農業体験のできる宿泊施設がありますが、それらと同じように、ホテルだけが目的の施設ではないということなのでしょう。

こういう集落を歩いていると、道の先に空が見えることの重要性を感じます。歩いている先に壁がある時は下部に穴を開けて空間を設けていることが多いです。手入れされた植栽があり、人はいなくても人の気配がするし、建物の幅が薄いので、路地から窓越しに向こう側の景色まで見えます。これも道にとって、歩く人にとって重要なことだと思います。

霧の中を彷徨っていたら綺麗な墓地进行を発見しました。集落によってスタイルは違うのですが、どこの集落にも墓地があり、人々が毎朝手を合わせているとしか思えないほど綺麗な花で飾られています。普通に歩いていると見つからない場所が多いのですが、その墓地からの景色が美しいのも共通しています。日本の古い集落にも同じような墓地がありますが、ニュータウンにはお墓が無いので、お墓参りが日常的なものになっていません。しかし南仏の集落では、実は南仏だけでなく、ドイツの開墾団地でも、近くには毎日のように通える墓地があるのです。過疎の小集落には、例えばパリの大学で学んだような若者が戻って来て、それで若者が結構いるのですが、帰って来る理由の一つに墓を守ることがあると思います。パソコンがあれば山岳集落でも仕事ができる環境になっていることも大きいのでしょう。言い換えると、お墓があるから限界集落にならないのだとも言えるように思えます。「美しい景色と美味しいお酒や食べ物があればほかに何が要るの?」は単なるやせ我慢だけでもなさそうです。



綺麗な花で飾られた墓地(ガッサン)



## 集まって住むカタチのデザイン ～世界の美しく小さな集落やまちを訪れて思うこと～



全く揃っていないファサード(ソスペル)

同じようにマントンからバスで行けるソスペルという川に囲まれた集落は、建物が城壁の役割をしています。ファサードはどこもバルコニーが付いていますが、皆が勝手につくっているように見えてまったく揃ってはいません。マルセイユ近郊のあるマルティエグという運河沿いの小集落も、絶対に建物を揃えるものかというような風景でした。でも、実際、美しくて楽しそうなのです。

アムステルダムの方頭の再整備でも、雰囲気は揃えて、景色は共有するけれども、建物の高さや窓の位置を揃えてはいけないというガイドラインがあります。近年のイギリスやオランダの団地の再生でも、道路からのセットバックはダメで、開口部は透明ガラスしか使っていないというルールがあって、その透明ガラスのせいで、住戸からの開放感と共に人々が歩く道の環境を安全にしています。こういう集落とか開発地の再生の話を絡めながら考えると、日本との違いを感じます。男山の団地住戸リノベーションでもガラスの透明化が重要なポイントとなっています。

午前中に訪れると、毎日車が集まってマーケットになっている公園がありました。お店を出している人は近郊の田舎の人だけではなく、まちの人も同じようにそこに



公園で開かれていたマーケット(ソスペル)



住民は観光客と関係なく日常生活を楽しんでいる  
(サン・ポール・ド・ヴァンス)

店していることに驚きました。急峻な山道をロードレーサーで越えて来た高齢のおじさんが道端で休んでいたり、高齢化社会と言って沈んでいる日本とは対照的な様子でした。

サン・ポール・ド・ヴァンスは美しい城壁都市で観光客も多く訪れるのですが、裏道は人通りがなく、歩くと本当に気持ちの良い村でした。印象的だったことは「私たちが住んでいるまちなので観光に来てもらうのは構わないが、住んでいる人を尊重しながら訪れて欲しい」と言う主旨のことが看板に書いてあったことで、人々はペタンク等の娯楽を楽しみ、観光客とは関係なく、普通に日常生活を楽しんでいました。

南仏では一般の道路には信号がなくラウンドアバウトになっているところがほとんどです。狭い集落内には住んでいる人たちだけが車で入ることが出来るのですが、リモコン式で昇降する美しいバー状の車止めが設置されています。日本のようにチェーンのような車止めはどこにも見当たりません。足元周りのディテールも整備も丁寧で、“がさつ”ではないのです。街道沿いでは、バスで15分くらい走るとまた別の集落があり、似たような



丁寧に整備されたりモコン昇降式車止め  
(トゥーレット・シュール・ルー)



集落が多いのですが、どこも綺麗なのには驚きます。その中でも、私はやはり住人が自分の家を自由に改装している風景が好きで、不揃いの感じが綺麗だと思います。学生時代の大学では揃えるように習いましたが、絶対に揃っていない方が奥深く素朴で良いと思います。どうしたらこんなに美しくなるのかと思うほど、どのまちも手入れされていますが、それは住人が、誰かのためにしているのではなく、自分たちが気持ち良いから当然のように綺麗にしているのだと思います。

セーヤンという集落で見かけたカフェにある誰も座っていない椅子とテーブルも、まるでストリートファニチャーで、日中は誰も座らないままそこにあって、それが良い感じになっているのです。マルセイユの近郊では、近隣に住む人がまるで観光客のようにまち歩きを楽しんでいる集落がたくさんありました。例えば、カシという美しい港町は何度も訪れたお薦めの小さな港町ですが、歩いているのは地元か近郊のフランス人ばかりでした。

マルセイユから西にコートブルー線というローカルラインがありますが、そこで途中下車して偶然見つけたのが、先ほどお話したマルティグという運河沿いの町です。対岸から見ると、まるで「揃えたら罰金」とでも言われたかのように見事な不揃いの風景があって、それがとても美しいのです。写真では雑然として見えるかもしれませんが、この空気感の中で対岸から見るととても綺麗で、どうしたらこれほど揃わずにできるのかと思うほどなのです。日本なら効率の問題や高さ制限等によって自然と揃ってしまいそうですが、だからこそ、敢えて「揃えてはならない」という空気があるのではないかと感じてしまいます。

廃墟になりかけていたところに人々が戻って来たという集落もありました。工房にしたり、住宅にしたり、いろい

ろと使われていて、宿泊できる場所もありますが、それでも団体客などの観光客はいません。住んでいる数少ない住人たちは、皆いろいろなことをしていますが、あくせくすることもなく、緑を綺麗に手入れしながら楽しみつつ集落を維持しているように見えました。

サント・クロワ・アン・ジャレという集落は、修道院だったところが集落になった村ですが、昔の修道院の中に学校や工場があって、外には農園もあって、平日でも人々が働いているさまが良く見えました。集合住宅ですね。

限られた時間の中でいくつかの集落をご紹介しました。私はもはや集落歩きが趣味となっていますが、いわゆる視察のようなヒアリングをするわけではなく、ただその空気を感じるために訪れています。逆に自分でいろいろなことを発見でき確認できます。それをしみながら、日本ではなかなかできない異なる発想や考え方を共有できればと思っています。

今年から、戸建て主体のまちづくりを進めている住宅生産振興財団が発行している「家とまちなみ」(年2回発行)に、「旅で出会った世界のまちなみ」として連載していますので、参考にしていただければと思います。



見事に不揃いな風景 (マルティグ)



誰も座っていないが絵になる椅子とテーブル (セーヤン)



元々修道院であった集落 (サント・クロワ・アン・ジャレ)

# 集まって住むカタチのデザイン ～世界の美しく小さな集落やまちを訪れて思うこと～

## ■ 質疑応答

—— 不快なものはなかったのか。

江川：まあ、1つもないと言っても良いかも。どこの集落も綺麗で驚きます。電線は地中に埋設しているのではなく、敷地の中を目立たないように配線しています。水道は水汲み場から引いてポンプで汲んでいるようです。下水処理は、山の上まで下水道を引けないので、浄化槽処理をしています。トイレはきれいに使えるし、メンテナンスは良いですね。ネットワーク化されていない、自給自足する環境(=オフグリッド環境)ですが、ただ、パラボラアンテナはあって、ネットやケーブルテレビは有効に使っているようです。

—— 夜は人の姿があるのか。

江川：人が写っていない写真が多いのですが、山の中の集落だと昼間は農業で働きに行っています。私は下の小さなまちに宿泊しながらの集落巡りだったので、夕方にはバスで帰ってしまいます。いわば、人のいないタイミングで訪れていたことになりますね。(笑)。

—— 観光客は何を楽しみに来ているのか。

江川：日本のような土産物店はないし、食べて景色を、あるいは人生を楽しんでいるのではないのでしょうか。観光バスが行くようなところには行かなかった。移動型観光客とは会っていません。1ヶ月程度のバカンスなら滞在する人もいますが、日常的に滞在しないので専門のホテルがある集落にはなっていないと思います。これから日本も人口が減るので、做すべき点があるかもしれません。兼業すると忙しくなると思います。

—— 自動販売機やプラスチック製品はないのか。

江川：そもそもフランスは自動販売機が少なく、新聞等もキオスクのようなところで人が売っています。集落の近郊でもプラスチック製品は少ないように思います。

—— 人が集まる広場はあるのか。

江川：人々は小さなレストランや広場に集まっています。平日は皆が仕事をしています。バスが朝早くに出て夕方帰る便しかないし、農業の現場には小さなトラックで移動していると思います。車が通れる道が途中まであって、工事をしている人等も、途中まで車で、そこから先は猫車を使う等、使い分けているようです。車を持っている人は集落の外周部に停めているので、集落の中には駐車場はないところも多いですね。

—— 日本の集落とは気候が違うので建物の材料も違うが、似たような感じはあるか。

江川：日本の集落と似たような雰囲気がないことはないですが、日本の場合、まちの中にも外にも廃材や放置された電化製品等が散在している風景が多いですね。イギリスもドイツもフランスも農業景観を大切にしていますので、集落の近郊や、集落に行く途中の景観が大変美しいのはうらやましいです。

—— ゴミがないのは、住民が各自で清掃しているのか。

江川：毎朝、皆が出したゴミを収集したり、各自の家で燃やしたりしていると思います。ゴミ置き場があるからゴミが捨てられるので、ヴェニスのように、ゴミ置き場をつくらないという逆転の発想で、使い回した

り、工夫したりしているのではと思います。

—— 廃墟になりかけていた集落に人が戻って来たきっかけは何だったのか。

江川：最終的には住民自身が「戻った方が良い」と考えたようですが、よその若い人を呼ぶ動きもあったようです。芸術家を招くようなこともやったようですが、居つかないですね。ただ、一時しのぎには役立っていたようですし、工房も近郊集落のリノベーションには役立っている部分もあると思います。

—— 限界集落に遭遇したことはないのか。

江川：大昔の廃墟はありますが、いわゆる限界集落っぽいところには行っていません。日本でも限界集落があるとすれば、新しくできたまちだと言われていますが、余程の山奥でどうしてもない落人の集落のようなところは物理的に維持することが不可能になるかもしれませんが、墓地が維持されているようなところはなくなるのではないのでしょうか。南仏の鷲の巣村とよばれるような急峻なところに住んでいる高齢者もいますが、彼らがいなくなると、若者たちが「戻らなければならない」と思うのではないのでしょうか。今は様々な仕事の仕方ができるし、逆に都会で働きたくない人もいると思うので、そういう気がしています。



当日の様子